

論文の内容の要旨

論文題目

**Social participation and psychological resilience
among incontinent elderly persons under long-term care in Japan**
(失禁のある要支援・要介護高齢者の社会参加と心理的レジリエンス)

高橋 競

背景と目的

世界に類をみない速度で超高齢社会になった日本において、在宅要支援・要介護高齢者は様々な問題に直面している。例えば、外出頻度が週に一度かそれ未満の状態である閉じこもりは、認知症や寝たきりにつながる大きな健康・社会問題になっている。また、心身機能の低下により生じる尿失禁や便失禁は、身体的健康だけではなく、心理社会的健康にも大きな負の影響を及ぼすものとして知られている。

近年、ストレスを跳ね返す力として注目を集めている心理的レジリエンスは、失禁のある在宅要支援・要介護高齢者の閉じこもりを予防し、積極的な社会参加を促進する可能性を持っている。当然のことながら、失禁のある在宅要支援・要介護高齢者の社会参加には、失禁の医学的治療が基本かつ重要である。しかし現状においては、それを受けていない者も多い。状況改善のためには、医学的治療の啓発に加え、心理的レジリエンスに注目することもまた重要である。しかし、失禁のある在宅要支援・要介護高齢者の社会参加への心理的レジリエンスの影響に焦点を当てた研究はこれまで行われていない。

本研究は二つの目的を持つ。まず、失禁のある在宅要支援・要介護高齢者における閉じこもりと測定可能な心理的レジリエンスであるストレス対処能力との関連を明らかにすること。そして、失禁がありながらも積極的に社会参加している在宅要支援・要介護高齢者のレジリエントな心理特性を質的研究法により分析することである。

方法

千葉県君津地域（木更津市、君津市、袖ヶ浦市、富津市）において、量的研究と質的研究を組み合わせた混合研究（説明的デザイン参加者選定モデル）を実施した。対象者は、要支援1・2または要介護1・2の認定を受け、65歳以上で、在宅で生活していた者とした。重度の認知症があった者は除外した。

量的研究では、介護支援専門員95名による質問票を用いた訪問調査を実施した。質問票には、基本属性、要支援・要介護度、現疾患の種類、認知症高齢者の日常生活自立度、外出頻度、日常生活動作（食事、移乗、整容、入浴、歩行、階段、更衣、トイレ動作）尿失禁、便失禁、排尿・排便に関する心理的ストレス、心理的因子（受領的ソーシャルサポート、主観的ソーシャルキャピタル、ストレス対処能力）を含めた。対象者413名からの回答を、記述統計、二変量解析、ロジスティック回帰分析により解析した。

質的研究では、量的研究の参加者のうち、失禁がありながらも毎日のように外出していた11名を選定した。プライバシーの守られた場所において、対象者一人ひとりにインタビューガイドを用いた半構造化インタビューを実施した。インタビューガイドには、社会参加、失禁の心理的ストレス、人生の志向性、ソーシャルサポート、ソーシャルキャピタルに関する開かれた質問を含めた。対象者の同意を得た上で、全てのインタビューデータを録音し逐語録に起こした。分析は主題分析により行った。対象者の積極的な社会参加に影響する心理特性と環境因子について、演繹的かつ帰納的に作成した主題を繰り返し比較した。さらに、全ての主題の関係を表す概念図を作成した。

結果

量的研究の対象者のうち、尿失禁または便失禁のあったものは170名（41.2%）であった。また、外出頻度が週に一度かそれ未満の閉じこもりは144名（34.9%）であった。ロジスティック回帰分析の結果、失禁のある在宅要支援・要介護高齢者の閉じこもりには、歩行に介助を要すること（AOR 3.05, 95%CI 1.28-7.26）、トイレ動作に介助を要すること（AOR 3.77, 95%CI 1.40-10.11）、そしてストレス対処能力（有意味感）が低いこと（AOR 0.74, 95%CI 0.61-0.91）が関連していた。

質的研究において、積極的に社会参加するための基本的心理特性に「外出したい気持ち」があった。恥ずかしさや不安などの「失禁による心理的ストレス」は、「外出したい気持ち」を弱めていた。しかし、「他者と関わりたい気持ち」、「身体を動かしたい気持ち」、「失禁を管理できる自信」という三つのレジリアンな心理特性は、「外出したい気持ち」を促進していた。これらのうち、「失禁を管理できる自信」は、尿とりパッドや使えるトイレなどの環境因子の影響を強く受けていた。

結論

本研究は、在宅要支援・要介護高齢者の社会参加、失禁、そして心理的レジリアンスを、量的および質的に分析した最初の研究である。

量的研究においては、失禁のある要支援・要介護高齢者の閉じこもりを予防するためには、ストレス対処能力（有意味感）を考慮する必要があることが示唆された。さらに、先行研究において重要視されている歩行だけではなく、トイレ動作の自立も重要であることも示唆された。一方、質的研究においては、失禁というストレスを乗り越え積極的に社会参加するため、「他者と関わりたい気持ち」、「身体を動かしたい気持ち」、「失禁を管理できる自信」というレジリアントな心理特性が重要であることが示唆された。また、尿とりパッドや使えるトイレなどの環境因子を整えることで、「失禁を管理できる自信」を促進できる可能性があることも示唆された。

本研究の結果は、失禁のある在宅要支援・要介護高齢者の社会参加には、失禁の医学的治療に加え、心理的レジリアンスもまた重要であることを示唆している。具体的には、ストレス対処能力（有意味感）、他者と関わりたい気持ち、身体を動かしたい気持ち、失禁を管理できる自信を高めることが重要である。